

土壤水分状態の違いがウメ幼木の成長に及ぼす影響 ウメ幼木は周年の適湿管理で健全に成長

1. はじめに

新規に開園されたウメ園はレキ率が高く、保水力が低い土壤が多い。そこで、土壤水分状態とウメ幼木の成長について検討した。

2. 試験方法

センター内アクリルハウスにおいて、60Lポット植栽の「南高」1年生幼木を用いた。栽培土壤は、造成土（頁岩）に容量比20%のおがくず牛糞堆肥を混和した。

試験1は、1997年12月8日に定植し、少湿処理期間は1998年5月9日～6月13日及び7月13日～8月13日とした。少湿程度はかん水間隔を変えて調節し、ポット重量から換算した土壤水分状態がpF3.0（適湿区）、3.8（少湿1区）及び4.2（少湿2区）となる前にpF1.8以下にした。新梢伸長期に定期的に伸長停止枚数を測定し、解体処理は1998年9月2日に行った。

試験2は、1995年12月に定植し、少湿区はかん水間隔を7日間隔でポット当たり3Lとし、1996年12月～1997年3月まで行った。適

湿区は毎日、ポット当たり3Lかん水した。解体調査は1997年6月に行った。

3. 試験結果

(1) 新梢伸長期（5月9日～6月13日）における少湿処理では、伸長停止が適湿状態に比べて20～30日ほど早く、乾燥程度が大きいほど早かった（図1）。

(2) 5月と7月（各1カ月）の少湿処理では、乾燥程度が大きいほど成長（乾物重）は減少し、その影響は地上部で大きく適湿条件の約70～80%であった。（表1）。

(3) 冬期（12月～3月）の少湿処理では、地下部乾物重が約60%に減少し、全重も80%であった（表1）。

4. おわりに

造成土植栽のウメ幼木は、少湿処理により新梢伸長が劣り、乾物重も減少した。パイロットなど保水力が低い園では、粗大有機物マルチやかん水などで適湿状態を保つように水分管理することが、年間を通じて大切である。

（うめ部 佐原 重広）

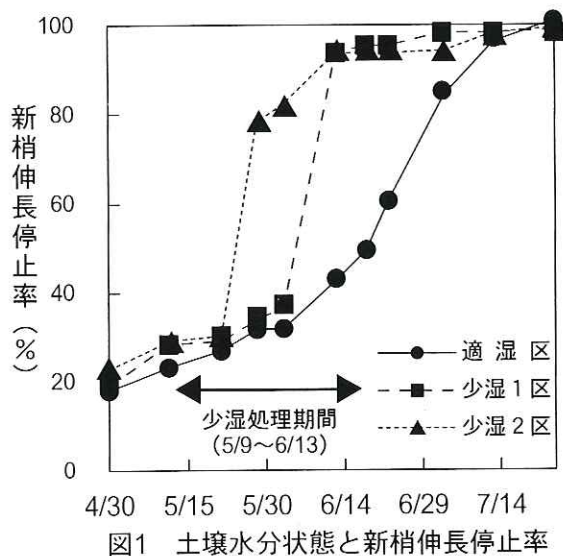


図1 土壤水分状態と新梢伸長停止率

表1 土壤水分状態と乾物重 (乾物重 g)

処理区	地上部	地下部	全重
試験1 ※1 適湿区	416 (100)	151 (100)	567 (100)
少湿1区	335 (81)	152 (100)	487 (86)
少湿2区	288 (69)	135 (89)	423 (75)
試験2 ※2 適湿区	374 (100)	200 (100)	574 (100)
冬季少湿区	331 (89)	127 (64)	458 (80)

※1 土壤水分状態が、pF3.0(適湿区)、3.8(少湿1区)、4.2(少湿2区)以下となるようかん水間隔を変更

※2 適湿区は毎日ポット当たり3Lかん水し、冬季少湿区は7日間隔で3Lかん水